花山だより（5月）

我が日食は愈々目眉に迫つた．新聞は觀測地に特派員を送り，日食記事が各地の紙上を賑はすやうになつた．國外の觀測隊來朝の先着として英國ケムブツリヂ大學よりストラツトン博士一行が，神戸埠頭に着き，東京の早乙女博士，花山より山本臺長の出迎へあり，花山の各觀測隊は各々最後の支度に取掛つた．5月12日突然，別頁に精報されてゐる如く，日食觀測の大變更が實現され，山本臺長は，稻葉，堀井兩氏を伴つて，シベリヤ・オムスクへ，又公文，高倉兩氏は滿洲呼瑪へ向ふ事になり，茲に北海道・遠輕に赴く高城氏の1隊を合せて，コロナ變動觀測の三重點網が張られる事になつた．實に愉快な事で，關係臺員一同感激と共にその重責を感じつゝも，大いにこの大計畫を悅び，互ひに勵まし合ふ事となつた．同9日，北海道枝幸，中頓別への先發隊の數多の器械，大小道具が威勢よくトラツクで運び出された．同12日，引續き第2回目の北海道行荷物が搬出された．何れも今回の運送者は，協會の古參會員たる京都の深尾尙武氏の助力によるものである．

13日夜，京大樂友會館に於いて協會主催の送別晩餐會が開かれ，山本會長夫妻を始め全臺員と外賓を混へて20名餘の盛宴を張り，激勵に成功と健康の祈りを受けつゝ，一種悲壯な決意を示して別れる．翌14日，早曉稻葉，柴田，小山，荒木(九)，荒木(健)の諸氏が先發隊として各々の觀測地へ向け出發した．早くも花山には人少なき淋しさの靜けさが漂ふてゐる．17日，公文，高倉兩氏が，荒木助教授の觀測隊の一同と滿洲へ行を共にするべく，同日朝，5月雨を突いて，西下した．尙この日夜，山本臺長は中村氏を伴つて北海道各觀測隊を激勵すべく急ぎ東上さる．最早や天文臺は休息狀態に入つたも同樣，後には後發準備に慌しい2，3の臺員，今を盛りのさつき，きりしまの花が麗しくも留守役を勤めてゐる外，鶯の聲，春蟬の啼く中に，5月の太陽に照らされた白い大小ドームが，靜かに臺員等の遠征を祝福してゐる．

—(5月17日 葵星)—